

# 光の子



No. 80 1998. 10. 1

● 神の召しに応える (ヘブライ人への手紙第5章4節)



「おつきさまのなかには」

え・中島英子

「秋」

水平線の高き日燕婦りけり

曼珠沙華枯れつつ黒を加へけり

新涼の暈にありし竹の笛

月を待つ島の暗きに舟溜り

境内に土俵の跡や威し銃

盛り上り黒くなりゆく秋の潮

噴煙の西へ流るる大花野

伊藤 通明 (「白桃」主宰)

# 伴走者キリスト

ピリピの信徒への手紙 3・19

彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、  
恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。

理事長 福島 勲

今春長野で開かれたパラリンピックの女子バイアスロンで、小林深雪選手が金メダルに輝いた。

この競技はスキーで滑って途中に射撃が加わる。目の不自由な人たちが競うのであるが、ガイド（伴走者）が必要である。

先に滑走する伴走者に従って滑り、射撃は特殊な電子音響装置を使う。音を頼りに的に向かって撃つ。見事優勝した小林さんは、伴走者の中村由紀さんと抱き合って、喜びの涙を流していた劇的感動のシーンだった。ふと私は、われわれの人生もこの競技に似ていると思った。

われわれ魂の健常者だと思っていられるのは大きな誤りで、重度の障害者なのである。賢者ぶるがその実愚鈍者、善人を装うが偽善者であり、更にいえば悪魔的存在者である。

善の目が霞んで的が定まらず、走るべき方向さえわからない。

まさしく伴走者が必要である。窮極の伴走者が教師でも、伴侶でもなく神に他ならない。

躓き倒れ、失望し、立腹したとき、近頃の若者の言葉のようにキレたとき、悪に手を染めようとするとき、とどめ、望みを与え、悪を阻止し守ってくれるのは、われわれの知性や悟性や良心でもない。

神の指示、神のささやきを聞き分け歩むのでなければ、この危機を脱することは出来ない。

これには人はまことの敬虔さ、謙虚さを必要とする。

イエス誕生の時、東方の学者達がきて、かいつく桶に伏している幼児を礼拝したという聖書の物語は、高慢な人間への深遠絶妙な訓えである。

世の賢者たちは聖書の示す言葉や物語に耳を傾けようとはしない。それらをナンセンスなこと、またせいぜい古代の人たちの神話の記録くらいにしか認めようとしぬ。

敵をも愛せよといわれるイエスの攻撃の対象は、学者、パリサイ人富める者らであった。

学者や教師は傲慢だ、政治家や偽宗教家は偽善で、官僚は権威を笠に着て不遜の限りを尽くす。

人間って何と己が腹を神としたがるのか（ピリピの信徒への手紙三・十九）

幸福であるとは、何のおそれもなしに自分を眺めうるということ（ヴ・ベンヤミン）、俯仰天地に愧けない（孟子）という。そんな生活の出来る者など一人もないのに。伴走者不要で、独立できると信じている。「たとえどんなに単純にばかげたように見えても、それは神のすぐれた

た権威と力と知恵にもとづくみ言葉であり、みわざであり、物語であり審きなのである。

そして知者賢者を愚かにする書物であり、知恵のない者、単純な者だけに理解される書物である（マタイによる福音書十一・二十五）

聖書は尽くし得ない鉅山でありこの本の中にキリストが横たわっておられるのである。（ルター・卓上語録）

賢くなると思われる科学万能を掲げる今日の世界は、神との距離をますます大きく拡げている。

他人ごとではない。キリスト者と自認している者の中に独走している者がいないだろうか。

聖書の原義からかけ離れた自己流の解釈をして、聖書学者ぶる者、時代に迎合して福音を歪める者、神の宮を強盗の巣とし（マタイによる福音書二十一・十三）聖なるものを俗と化し、兄弟姉妹と呼びながら隣人となれない（ルカによる福音書十・二十五・善いサマリヤ人のたとえ）者がいるだろう。

ともに伴走者イエスからはほど遠いところを、わがもの顔に走っている人よ、どこへどう走っていいこうと

# 2つの文化に生きる

14

日本キリスト教団東大宮教会  
バーガー 京子

入ってきた時があつて、後でみんなで吹き出してしまったことがあつた。いずれにしても日本とアメリカの時差は約半日である。日本が起きている時はアメリカが眠っていて、アメリカが起きている時は日本が眠っているわけだ。日本が「ああ、今日も一日よく働いた。もう寝ようか。」と思っている時に、アメリカでは「さあ、これから新しい一日が始まるんだ。」と力が漲っている訳だ。

時差ボケと一言にいうけれども、この全く逆さまの生活に慣れるのは、やはり数日はかかってしまう。

昼間、異常に眠くなったり、夜中の三時に目が覚めて、一日の活動を始めてしまったり、朝食を食べているのか、夕食を食べているのか、分からないまま数日間を過ごすことになる。飛行機の中もこれはまた、面白い。夫の田舎はテネシー州なのだが、朝、テネシーを発ち、お昼頃シカゴに着く、そこから国際線に乗って成田空港まで延々十三時間かかる。機内では映画を観たり、飲み物を飲んだり、朝食か夕食か分からない食事を三回ほどする。そして成田空港に着いてみると、翌日の夜になつてい

いたけれど、実際の食事は何食だったのか考えると分からなくなつてしまう。時差を利用して面白い体験もできる。今年は、私の誕生日の前日に飛行機に乗ってみた。そして日本に着いてみると、お誕生日はもう殆ど終わつていて、家につく頃にはもう寝る時間だった。「お母さん、今年を年をとらないことにしたから。」と家族に宣言して床に着いたのだが、本当に今年は一つ年をとったという実感がない。

この夏のアメリカ訪問は一年半ぶりだったが、みな元気そうで何よりだった。子どもたちは一年半というブランクが丸で全くなかつたように、いとこ同士で、いつものようにはしゃぎまわつた。芝生を駆け回りながらボール投げ、水遊び、かくれんぼ、プールなど、本当によく遊んだ。

「もうすぐ運転免許が取れる！」と目を輝かせて教えてくれた十五歳になる姪がCDプレイヤーを持ち込み、今流行りの曲をみんなで聞いたり踊ったりという新しい遊びも加わつたりした。子どもたちの年齢が上がるに連れて、もめ事が出てくるのも成長の一つということも実感した。前回までは十五歳の姪がすべての遊びを仕切っていたのだが、今回は「それは嫌だ。こつちをしたい」など、自

己主張が加わつた。特に、十一歳の娘は今まではシャイ（恥ずかしがり屋）で通っていたが、いつもになく積極的に自分の意志を伝えていた。私はその光景を眺めながら娘は九月から始まる新しい生活のことを意識しているのではないかと思つたりした。

新しい生活。この夏のバーガー家での一大決心は子どもたちを日本の学校から都内のアメリカンスクールに移したことだ。これは突然、思いついたことではなく、長い間、家族の中で考え暖めてきた上での決断だった。子どもたちは日本の学校では、勉強面でも友だち関係でも特に問題があつたわけではないのだが、どうしても二つの国の教育を受けさせたという願いから実行した。「国際社会」と一言でよく言われるが、その本当の意味は何なのだろうと改めて考えさせられている。二つの文化に生きる子どもたちがその両方の良い面を吸収して育つていって欲しいと心から願つてやまない。







現場から

### 光の子たちと ⑨

あまり暑くならなかったような思  
いが残る夏も終わり、子どもたちの  
季節は「秋」になりました。

まずは夏休みのご報告から・・・  
四月から準備してきた小学生六名  
のメンバーと、二人の高校生のヘル  
パー、職員六名での登山が実行され  
ました。

毎年お世話になっている谷本清光  
画伯の阿登久良山荘への三泊四日  
の旅です。到着したその日は、木登り  
をしたり、木に綱を結びつけてブラ  
ンコを作っていたで遊んだり、  
のんびり楽しく過ごしました。

二日目、朝四時に起きておにぎり  
を作り、いざ山へ！。あいにくの雨  
でした。それでも登山道へ向かいま  
した。十分も歩かないうちに「疲れ  
たよ」という子を「最初がんばれ  
ば後は楽だから」と励まし進みます。  
本当はそう言って自分を励ましなが  
ら・・・。それでも降ったり止んだり  
の霧雨に少しづつ着ているものが濡  
れ、汗が冷えて身体が冷たくなって  
きます。雨で山道はぬかるみ気味で  
す。未だ半分にも達していないのに  
標準タイムを二時間もオーバーして

います。これは山頂まで行くのは難  
しいかも知れないと思いつながらも前  
進です。三叉峠が見えてきたところ  
で昼食をとっている時雨は更に降っ  
てきました。おにぎりを急いで食べ、  
上を目指しついに山頂に到着しまし  
た。

雨の中登ってきたのは、いくつか  
ある中でも最も難度の高いコースだっ  
たようで、山頂で出会った人々が口々  
に「小学生がここを上ってきたの？  
すごいねえ。将来はエベレスト登山  
隊だ、アツハツハツ」と言っていて下  
さりました。がんばった子どもたちも  
ちよつと誇らしげです。

小学一年生の小さい体でがんばっ  
た佳美、始めての登山で泣きながら  
進んだ美夏、寒いと震え、下山の時  
は涙をこらえながら進んで根性を見  
せてくれた由花、常に先頭を行き疲  
れた様子など全く見せなかった元氣  
な隆一、「下るのが楽しいの」と、  
ものすごいスピードで下っていった  
詩美、一番年上としてみんなを引っ  
張ってくれた信一、ヘルパーの将司  
と、勇。それぞれの子どもたちが自  
分の力を精一杯出し切って一生懸命

がんばりました。雨の中の厳しい登  
山の経験は、きつとひとり一人の子  
どもたちの心に残る体験となり、ど  
うしても自分の力だけで生きていか  
なければならぬこれからの自信の  
一つになったことでしょう。

谷本画伯をはじめ、ご協力いた  
いた皆さまのお陰で、今年もこんな  
風に夏休みのクライマックスを創る  
経験をすることが出来ました。  
ありがとうございました。

秋の高い空がすがすがしく拡がり  
運動会の季節がやってきました。小  
学校の運動会も晴天に恵まれました。  
入場行進の列を何気なく見ると五・  
六年生の中にいる詩美が一人だけ何  
がちよつと周りの子と様子が違いま  
す。足元を見ると白いハイソックス  
の中にひとり短い緑色のソックスで  
す。鼓笛パレードのためにみな白い  
ハイソックスで揃えるように言われ  
ていたのです。何日前に渡して置  
いたのですが、当日は本人も私も忘  
れてしまいました。慌てているのは  
私だけ。本人はちよつとも平気な顔。  
いざ鼓笛隊のパレードの始まりです

藤本 曜子

詩美は花形のリングバトンで前  
方を行進しています。「こんなに上  
手になったんだ！」と感動してい  
ふと足元を見ると、何と裸足！。私  
は口をぱかんと開けてしまいました。  
何のために届けたのだろう・・・。  
でもパレードはとても素敵だった  
し、詩美も一生懸命だったので、足  
元はそんなに気にならなかったのだ  
は（希望的見解）と思います。  
家に帰って詩美に靴下のことを尋  
ねると、全く気にしていない様子で  
「別にそんなのどうでもいいじゃん」  
と。そうか、たいしたことないか、  
と思うことに決めました。マイペー  
スな彼女なりの考えがあるのでしょ  
う。



秋、たけなわ。スポーツ、部活、  
文化祭、勉強も・・・それぞれの子ど  
もたちの活躍の場が増えていきそ  
うです。

### 養護メモ 75

### 愛される

菅原 哲男

児童養護施設光の子どもの家は、  
妊られたときから期待され、喜ばれ  
るといふ当たり前の経験が少ないか  
全くない状況で生まれた子どもたち  
に、溢れるような愛の中で育ち守ら  
れて大人になった者たちが、何より  
もこれまでに受けた親や家族からの  
愛の日々を思い起こし、心の中にた  
め込んだそれを惜しまず提供し、い  
つの日か彼らが、人を愛し、人を慈  
しむことが出来る主体となることを  
願って建てられ、運営されてきた。

海野真智は母が十六才、父が十八  
才の時に生まれた。未だ一緒に生活  
する前に妊娠、母方の実家に親子  
で同居していた。未だ若い母は、祖  
父母というには若すぎるような彼女  
の親たちに真智を預けつばなしで遊  
び歩いてきた。

父は建設現場で働いていて、夜と  
なく昼となく仕事の都合や仲間との  
つきあいなどで家に帰ってくるこ  
とが不規則だった。

祖父母は未だ若く働き盛りで、孫  
を可愛がる年齢でも心の状態でもな  
く、時間的にも経済的にも余裕がな  
かった。

だから、真智はその誕生も喜ばれ  
ず、生まれてきて愛されるといふ経  
験もほとんどなく、放置されて間も  
なく乳児院に入所した。真智は、光  
の子どもの家に行きつてしばらく  
の間は一人遊びをすることが多  
かったが、担当の保母に抱かれるこ  
とを覚えてからは、抱っこ抱っこの  
連続で、足が退化してしまうのでは  
ないかと危ぶむほどだった。

小学生になっても、みんなと一緒  
に遊びたいのだが、自分が中心でな  
いとだめで、他の者と共同できない。  
出来ないことに不満があるからみん  
なの遊びの邪魔をわざとする。結果  
仲間外れにされ、その者たちをいぎ  
たなく罵り激しく攻撃する。そうやっ  
ていじめられることも少なくない。

ある日の夕方、担当保母が両手に  
夕食の材料を持って家に入ろうとし  
ていた。そこへ真智がやってきて、  
「抱っこして！」と要求したが、両  
手がふさがっている彼女は「今は出  
来ないでしょう」と言っただけに入  
って行った。すると真智は、大声で泣  
き出しひっくり返って泣き叫んだ。  
とって返した保母は、「どうして

そんなに分からないの!？、抱っこ  
できる時と出来ない時があることが  
あるんだよ。」と怒りを含んで言っ  
たが、真智は構わず泣き続ける。

とうとう、そんなに分からない子  
どもとは一緒に食事が出来ません、  
と申し渡される羽目になった。  
しばらくそんなやり取りがあつて、  
ようやく落ち着いて家に入るまでに  
三〇分はゆうにかかってしまった。

生まれてから二、三才頃までに、  
「かわいい!」「抱かせて!」と抱く  
ことを要求する大人たちに囲まれ、  
頼りずられた経験を大凡の子どもは  
持つものなのである。

しかし、児童養護施設には二才を  
超えた子どもたちもやってくる。もう、  
ヒシと抱きたいような時期を超えよ  
うとしていて、抱かれて授乳された  
経験さえ持たないで乳児院からやっ  
てくるのである。

そんな子どもたちに児童養護施設  
では、「甘えること」や「抱かれる  
こと」から教えていかなければなら  
ないのである。

ここでは、学校から帰宅した時な  
ど、担当の子どもから抱っこの要求  
が出る前に、かわいい!抱っこさせ  
て!と、力一杯抱いてやることをす  
すめている。要求されてからの抱っ  
この数十倍の効果があるからだ。抱っ

こされても不自然ではない年齢や身  
体の成長のうちに・・・。

愛されて育った子どもたちで、問  
題を起す者もいるだろう。それは  
それで、愛し方に偏りや歪みがあつ  
たのか点検の要があると思う。

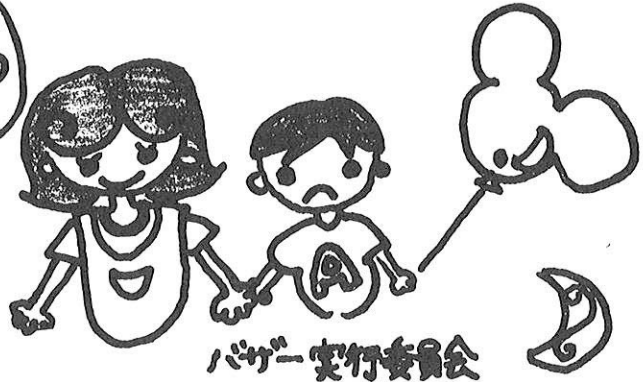
犯罪白書平成十年版によると、少  
年院に収容された少年たちの聞き取  
り調査で、非行を思い止まらせる最  
大の要因を四十%を超える少年たち  
が「家族」と答え、「悪いことをし  
た」と思う対象も大半が彼らを愛し  
たであろう親や家族だったのだから。  
非行や規範をはみ出す行為を思い  
止まらせる「家族」や「親」がいな  
いか、いても機能しない児童養護施  
設の子どもたちにとって決定的なハ  
ンディキャップなのである。

愛され、抱っこを要求された経験  
のない子どもたちが人を愛し慈しむ  
ようになることが出来るのだろうか。

愛されれば誰でもが人を愛するこ  
とが出来るとは言えない。しかし、  
愛されない者が人を愛することなど  
期待することさえできないのである。

そんな私たちの子どもたちを愛す  
る関わりが、社会福祉事業法の改正  
により、市場原理即ち貨幣の対価に  
しか評価されなくなろうとしている。  
貨幣を対価に人を愛する!。限り  
なく下品になろうとしている。

第6回 職員確保のための  
バザーにご協力を



☆1999年 五月下旬実施予定

バザー実行委員会

日誌抄 = 暮らしの風景 =

1998年 6月1日 ▶ 7月31日

- 6月 幼児 6名 小学生 6名 中学生 9名 高校生9名  
措置外 3名(求職者2名 未自立1名)
- 1日 館山市の吉田春江氏 加須市の落合美佐子氏 町内  
杓子木の真中秀宏氏 田村明美氏 しずくの会赤坂  
修子氏よりそれぞれ献品をいただく 感謝
- 平野美夏入所 原田家竹花保母担当
- 2日 加須市を中心とするボランティアグループしずくの  
会(梅沢三保会長)の草取りご奉仕 感謝
- 3日 東大宮の白田紀男氏より冷蔵庫のご寄付 感謝
- 4日 川口市の中村千絵氏よりバザー用品の献品を 感謝
- 東京都のSOS子どもの村より佐々木弥子施設長を  
はじめ8名が見学と意見交換の1日
- 5日 町内斉藤良子氏よりお米をたくさん 感謝
- 6日 金子嘉男後援会会長が低く垂れ下がった空を睨み  
ながら決行の判断を下し第5回目になった 定員外職  
員確保のためのバザー実施 日中はよく晴れてバザ  
ー日和 後援会11名 しずくの会13名 学生ボラ  
ンティア20名のお手伝い下さった方々と お出で  
下さった方々に心から感謝
- 9日 神愛ホームより藤波施設長以下3名が見学と研修に
- 16日 町内の山本愛子氏 中島睦雄氏 桑尾たえ子氏 栗田  
久男氏より献品をいただく 感謝
- 18日 高3の高山嬉思春期の精神不安定により入院 両親

- が妊娠出産の前後に薬物中毒に冒されていたことが  
大きな原因の一つと推量される悲劇 シンナー覚醒  
剤などの薬物濫用に警鐘乱打
- 24日 林光製作所近藤栄社長よりワゴン車のご寄贈 感謝
- 27日 トワイライトスティ第1号受入
- 7月
- 6日 町内の針ヶ谷文英氏 今成みつ子氏 農協の塩田氏  
台 明氏 中島幸雄氏 横浜市の大段聖子氏より献品を  
い ただく感謝
- 千葉県知覚的障害児施設植の木学園より施設長以下  
3名が見学と交歓に
- 8日 恒例になった感じの新座市 志木市の蕎麦屋さんが  
来訪して手打ち蕎麦の実演と夕食会を後援会が主催  
して 島田徳三町長も駆けつけ感謝状の贈呈をして  
労をねぎらって下さる 感謝
- 18日 終業式 夏休み前夜祭
- 27日 江森ヘヤーサロンより散髪のご奉仕 ありがとう
- 長野県小海町にある谷本清光画伯のアトリエに宿泊  
させていただき 小学生がハケ岳連峰の主峰赤岳に  
登頂 いつも完璧にご準備してお待ち下さる谷本画  
伯のご厚意は光の子どもの家の宝物だ 感謝
- 30日 恒例の女子聖学院CCFワークキャンプ 聖書に聴  
き祈りそして労働する汗の美しさ 感謝(くら)

反 射 光

☆台風十号で園庭の桜の枝がすっか  
り裸になりました☆この夏たくさん  
の方々のおかげで子どもたちの「夢」を  
育てる冒険や試みが出来ました☆開  
設以来十数年になる湯河原の海水浴  
に行った子どもが、大きな海に向かい、  
「ねえ、この海はお空とつながって  
いるの？ずーっと泳いでいくとお空に  
けるの？」と真剣な眼差しで聞いた  
という。微笑ましいひとときはその子  
どもにとって「夢」のある現実を垣  
間見たのでしよう☆朝日新聞厚生事  
業団の主催する海外生活体験の旅に  
応募した高二の紅子が見事この暮れ  
にアメリカにホームステイします☆国  
際的な働きをして地球規模で人の役  
に立ちたいと中学生の後半からそんな  
「夢」を暖めて、それが可能かも知れ  
ない高校に入学して大学を目指して  
いました☆そんな子どもたちの「夢」  
に見劣りしないような「夢」を大切  
にしたいと思っています☆地域の子ど  
もの問題を解決するためのお役に立っ  
こと、今、私たちの「夢」のひとつ  
です。乞う支援  
(哲)